

◆2021年3月第1週の説教

■日時:2021年3月7日(日)10:30-11:30 受難節第3主日

■場所:立川教会

■説教:飯島信牧師

■説教題:「御心に適うことが行われますように」

■聖書:マルコによる福音書 14:27-52(新約 p92)

■讃美歌:211「あさかせしずかに」・505「歩ませてください」

お早うございます。

3月7日(日)に解除される予定であった緊急事態宣言が、さらに2週間延長されました。皆様への御手紙にも記しましたが、先週の役員会で、私たちの教会の主日礼拝は3月末までオンラインで行うことが決まりました。その結果、4月4日(日)のイースター礼拝から、通常の礼拝を再開することになりました。どうぞ、それまで、しっかり健康を守っていただき、4月4日(日)には、皆さん元気なお顔で再会したいと願っています。

ところで、今週の3月11日(木)は、15,889名もの未曾有の犠牲者を生み出した東日本

大震災より10年を迎えます。そして、今なお、家族や友人・知人などが捜し続けている行方不明者が2,527名います。それらの方々にとって、時は止まったままです。理由なき犠牲を前に、語る言葉を見つけることは出来ません。ただ、そのような方々がおられることを、いつまでも忘れることなく、心に覚えて生きて行きたいと思えます。

受難節第3主日です。

最後の晩餐を終えたイエス様と弟子たちは、祈りの山であるオリーブ山のゲッセマネに向かいます。

しかし、その前に、イエス様は、弟子たちの、そしてペトロの裏切りを予告します。

27節から31節です。

27:イエスは弟子たちに言われた。「あなたがたは皆わたしにつまずく。

『わたしは羊飼いを打つ。

すると羊は散ってしまう』

と書いてあるからだ。

28:しかし、わたしは復活した後、あなたがたより先にガリラヤに行く。」

29:するとペトロが、「たとえ、みんながつまずいても、わたしはつまずきません」と言った。

30:イエスは言われた。「はっきり言うておくが、あなたは、今日、今夜、鶏が2度鳴く前に、3度わたしのことを知らないと言うだろう。」

31:ペトロは力を込めて言い張った。「たとえ、御一緒に死なねばならなくなっても、あなたのことを知らないなどとは決して申しません。」皆の者も同じように言った。

弟子たちに語られるイエス様の気持、そしてイエス様の言葉を聞いた弟子たちの思いを考えます。先週取り上げた最後の晩餐の場面で、イエス様は次のように弟子たちに向かって言ったのを覚えていらっしゃいますか？14章18節、19節です。

18:一同が席に着いて食事をしているとき、イエスは言われた。「はっきり言うておくが、あなたがたのうちの1人で、わたしと一緒に食事をしている者が、わたしを裏切ろうとしている。

19:弟子たちは心を痛めて、「まさかわたしのことでは」と代わる代わる言い始めた。

この時に続いてイエス様が口にされた弟子たちへの不信の言葉でした。

「この3年間、寝食を共にし、私が心から愛した弟子たち。しかし、お前たちの誰一人として、私に最後まで従う者はいない。」

これを聞いたペトロは、いたたまれずに口を開きました。29節です。

29:するとペトロが、「たとえ、みんながつまずいても、わたしはつまずきません」と言った。

しかし、それに対し、イエス様は言葉を重ねます。30 節。

30: イエスは言われた。「はっきり言うておくが、あなたは、今日、今夜、鶏が 2 度鳴く前に、3 度わたしのことを知らないと言うだろう。」

読むのが辛くなります。

12 弟子の中でも、イエス様が最も愛し、又イエス様に対し、ただ一人「あなたは神の子、キリストです」との信仰告白を行ったペトロです。そのペトロに対し、自分への裏切りを告げたからです。

イエス様のこの言葉を聞いたペトロは、何よりも、誰よりも、悲しかったと思います。

だからこそ、力を込めて、言い張るのです。31 節。

31: ペトロは力を込めて言い張った。「たとえ、御一緒に死なねばならなくても、あなたのことを知らないなどとは決して申しません。」皆の者も同じように言った。

「たとえ、御一緒に死なねばならなくても、あなたのことを知らないなどとは決して申しません。」

ペトロのイエス様に対する誓いの言葉でした。

そして、オリーブ山に着いた彼らは、ゲッセマネと呼ばれていた場所までやって来ました。32 節から 34 節です。

32: 一同がゲッセマネという所に来ると、イエスは弟子たちに、「わたしが祈っている間、ここに座っていなさい」と言われた。

33: そして、ペトロ、ヤコブ、ヨハネを伴われたが、イエスはひどく恐れてもだえ始め、

34: 彼らに言われた。「わたしは死ぬばかりに悲しい。ここを離れず、目を覚ましていなさい。」

最後の晩餐に続く場面です。

イエス様にとって、12 弟子たちと共に過ごす最後の夜でした。

この時、まず、ペトロ、ヤコブ、ヨハネ以外の弟子をその場に残し、3人だけを連れて祈るための場所に向かっています。そして次に、この3人をも置いて、少し進んで、ただ一人祈りの場所へ行きました。ルカによる福音書によれば、イエス様が祈ったその場所は、3人から石を投げて届く距離にありました。ペトロたちからは見える場所でした。

しかし、すでにこの時、イエス様の様子は、「ひどく恐れてもだえ始め」「死ぬばかりに悲

しい」ものでした。原語を忠実に訳せば、自分を襲う非常な苦しみに驚き、困惑し、さらに死に渡されるほどの苦しみの只中にあると言うのです。(田川建三他)

そして、35、36節。

35: 少し進んで行って地面にひれ伏し、できることなら、この苦しみの時が自分から過ぎ去るようにと祈り、

36: こう言われた。「アツバ、父よ、あなたは何でもおできになります。この杯をわたしから取りのけて下さい。しかし、わたしが願うことではなく、御心に適うことが行われま

すように。」
今日与えられた聖書の箇所でも、最も重要な所で、又マルコが私たちにしっかり伝えようとした所です。

35節のイエス様の祈りですが、祈る時、当時は立って祈るのが普通でした。

しかし、この時の祈りは、「地面にひれ伏」しています。

どれほど、必死の祈りであったか分かりません。

祈りについて述べれば、私は、特に大切なことを祈る時、牧師室から出て会堂で祈ります。

その際、外出する時のように、着替えて身支度を整え、靴を履いて祈ります。

神様の前に立つ時の心の準備がそうさせます。

しかし、私はまだ、会堂の床にひれ伏したり、地面にひれ伏して祈った経験はありません。

ここに記されているイエス様の祈りの様子から見て、ただならぬ様子を知ることが出来ます。その様子を、さらに重く響かせるのが、「アツバ、父よ」と言う呼びかけです。この呼びかけは、マルコによる福音書全体で、この祈りの場面でしか唯一使われていない、イエス様から神様への呼びかけの言葉です。「お父さん」と言う、最も近い人に使う呼びかけの言葉です。

そしてイエス様は、神様がこれから自分に与えようとしている試練の”時”を、”杯”を、”十字架”を、取り除けて下さいと願います。神様は、取り除けることが出来ると知っているからです。言葉を換えれば、神様だけにしか取り除けることが出来ないと知っているからです。

自分を襲っている、自分でも驚くほどの恐れと苦しみ。

最早耐えることが出来ません。

だからこそ、この試練の”時”を取り除けて欲しい、過ぎ去らせて欲しいと祈りました。

私たちの祈りなら、この願いで終わります。

しかし、イエス様の祈りは続き、願いで終わりませんでした。

どんなに辛くても、厳しくても、耐え難いほどの試練であっても、自分の願いを優先させるのではなく、神様の意思に従うことを選びました。「しかし、わたしが願うことではなく、

御心に適うことが行われますように」と。

「わたしが願うことではなく、御心に適うことが行われますように。」

キリスト教の歴史は、迫害の歴史です。

ヨーロッパでも、日本でも、中国でも、韓国でも、キリスト教の宣教の歴史は、厳しい迫害の歴史でした。その歴史を貫いているのが、「わたしが願うことではなく、御心に適

うことが行われますように」との祈りです。宣教の担い手たちは、自分の命、そして自分と言う全存在を、神様の御手に委ねて歩みました。

37、38 節。

37:それから、戻って御覧になると、弟子たちは眠っていたので、ペトロに言われた。「シモン、眠っているのか。わずか一時も目を覚ましていられなかったのか。」

38:誘惑に陥らぬよう、目を覚まして祈っていなさい。心は燃えても、肉体は弱い。」

イエス様が、最も身近にいる、信頼してやまない、愛する弟子たちに求めたのは、自分の苦しみを理解し、そのために祈りを共にして欲しいことでした。苦しみや心配が強ければ強いほど、人は眠れなくなります。もし弟子たちが、イエス様の苦しみをほんの少しでも理解出来るなら、イエス様と共に目を覚まして祈ることが出来たはずです。他の弟子たちならともかく、少なくともイエス様の様子を見届けることが出来るほどの距離にまで伴ったペトロ、ヤコブ、ヨハネには、そのことを期待していました。しかし、彼らは眠ってしまい、しかも、一緒に死ぬとまで言ったペトロでさえもです。イエス様は、そのペトロにだけ声をかけました。「シモン、眠っているのか。わずか一時も目を覚ましていられなかったのか。誘惑に陥らぬよう、目を覚まして祈っていなさい。心は燃えても、肉体は弱い」と。

この心は、霊と訳される言葉が使われています。

神様から遣わされた霊は心の内に燃えていても、しかし肉体の誘惑、サタンの誘惑に負けてしまっているとの指摘でした。

39 から 42 節です。

39:更に、向うへ行って、同じ言葉で祈られた。

40:再び戻って御覧になると、弟子たちは眠っていた。ひどく眠かったのである。彼らは、イエスにどういえば良いのか、分からなかった。

41:イエスは三度目に戻って来て言われた。「あなたがたはまだ眠っている。休んでいる。」

もうこれでいい。時が来た。人の子は、罪人たちの手に引き渡される。

42: 立て、行こう。見よ、わたしを裏切る者が来た。

1度ならず2度、2度ならず3度、イエス様は祈りに向かいます。

しかし、あれほどの注意を受けたにもかかわらず、1度ならず2度、2度ならず3度、弟子たちは眠ってしまいました。最も身近にいて、イエス様があえて選ばれた3人の弟子たちでさえ、イエス様の苦しみを思い、その苦しみをわずかでも分かち合うことが出来なかったのです。このことは、イエス様は、文字通り、ただ一人神様の御前に立ち、神様が用意された十字架の道へと進まれることを意味します。誰をも伴わず、ただ1人です。

同時に、私たちは41節、42節の言葉に引かれます。

3度眠っていても、イエス様は弟子たちを叱りませんでした。

「もう、これでいい。」「もう十分だ。」「お前たちは、お前たちの出来るだけのことをしたのだ」と言われました。

ゲッセマネの園で、3度同じ祈りを繰り返したイエス様に示されたのは、神様のイエス様に対する変わらぬ意思、十字架への道でした。そして、イエス様は、その意思に従う道を選び取ります。「時が来た。人の子は、罪人たちの手に引き渡される。立て、行こう。見よ、わたしを裏切る者が来た。」

決然とした言葉でした。迷いを捨て、神様に全てを委ね切った者の言葉でした。

43節から47節、イエス様が捕らえられる場面です。

43: さて、イエスがまだ話しておられると、12人の1人であるユダが進み寄って来た。祭司長、律法学者、長老たちの遣わした群衆も、剣や棒をもって一緒に来た。

44: イエスを裏切ろうとしていたユダは、「わたしが接吻するのが、その人だ。捕まえて、逃がさないように連れて行け」と、前もって合図を決めていた。

45: ユダはやって来るとすぐに、イエスに近寄り、「先生」と言って接吻した。

46: 人々は、イエスに手をかけて捕らえた。

47: 居合わせた人々のうちのある者が、剣を抜いて大祭司の手下に打ってかかり、片方の耳を切り落とした。

「先生」とは尊敬の言葉です。「接吻」は親愛の情を示します。しかしユダは、これらの言葉と行為の本来の意味を転倒させ、裏切りの道具とするのです。45 節の接吻と言う原語は、44 節で使われている挨拶を表す接吻とは違い、熱烈な接吻を意味する原語が使われています。ユダの裏切りの堅い決意を表していました。

48 節から 50 節、そして 51、52 節。

48: そこで、イエスは彼らに言われた。「まるで強盗にでも向かうように、剣や棒を持って捕らえに来たのか。」

49: わたしは毎日、神殿の境内で一緒にいて教えていたのに、あなたたちはわたしを捕らえなかった。しかし、これは聖書の言葉が実現するためである。」

50: 弟子たちは皆、イエスを見捨てて逃げてしまった。

51: 1 人の若者が、素肌に亜麻布をまとってイエスについて来ていた。人々が捕らえようとすると、

52: 亜麻布を捨てて裸で逃げてしまった。

「弟子たちは皆、イエスを見捨てて逃げてしまった。(若者も又) 亜麻布を捨てて裸で逃げてしまった。」

この時、私たちは 31 節の言葉を思い出します。

「ペトロは力を込めて言い張った。『たとえ、御一緒に死なねばならなくなっても、あなたのことを知らないなどとは決して申しません。』皆の者も同じように言った」と言う言葉をです。

イエス様と 12 弟子との間には、このような出来事が起こっていました。

しかし、にもかかわらず、マルコは、この書の冒頭に「神の子、イエス・キリストの福音の初め」と記しています。福音の初めとは、良き知らせの初め、私たちにとって救いと喜びの初めです。イエス様を捨てて逃げ去った弟子たちの姿を私たちに知らせながら、マルコは救いの喜び、良き知らせを告げるためにこの書を書きました。

さらに言えば、28 節です。弟子たちが自分を捨て去ることを承知の上で、イエス様は「しかし、わたしは復活した後、あなたがたより先にガリラヤに行く」と語られています。自分を裏切る弟子たちを見捨てるのではなく、再び会い見(まみ)えることを予告するのです。

そして今日、マルコは、私たち 1 人ひとりに問うています。

イエス様が捕らえられた時、あなたはどこにいたのかと。

あなたがたは、どこにいたのかと。

祈りましょう。